

続・ふるさと

キツネのうわさ話

第8回

町史編さんのために、お年寄りから聞き取りして集めたキツネにまつわる、うわさ話を紹介する。

◇キツネの不思議

南無妙法蓮華経を唱えながら太鼓をたたくと、



小さなキツネが集まってくることがあるそうだ。祭壇の下なんかで、集まった小キツネがお祈りを聞いているということも聞いたものである。

◇キツネの嫁入り①

虫歯で子どもが夜泣きしたときに、モチグサがよく効くと聞いていたので、モチグサ採りに土手を歩いていたら、遠くのほうで光がピカピカ行ったり来たりしている。田植えを終

えたすぐの夜で、曇りの日だった。キツネの嫁入りかなと思った。

◇キツネの嫁入り②

秋の初めのころの曇りの夕方、山すそにポツポツと灯がついて行列ができる。「あれがキツネの嫁入りだ」と大人たちがよく言っていた。

◇キツネの嫁入り③

むかし、東高橋の中塚田に弁天様があつて、そこには三本の大きなマツの木があり、三本松とも呼ばれていた所である。春先から初夏にかけての夕方、キツネ火が東へ行ったり西へ行ったり、ゆらりゆらり揺れているのがよく見えたものである。

編集後記

□「台風〇号上陸」今年は何度この言葉を耳にしたことでしょうか。かつてない上陸数に、秋晴れはいつたいたどこへやら…。主婦には太陽が顔をのぞかせるそのときが勝負。
□勝負と言えば、熊VS人間。主食の木の実(あの巨体)にどのくらいの実が必要なのか気になるが…)が不足の中、お腹をすかせた熊が危険を承知で民家の軒先の柿を、一心不乱にほおばる姿。その後ご遺体で運ばれる映像を目にすると身勝手ながらも心が痛みます。全ては人間さまの播いた種でしょうが…。(ク)□



・Caryopteris divaricata Maxim (草丈約100cm・花約1cm)
・Anser albifrons (全長75cm)

黄金色をした稲穂も残り少なくなり、ススキに鉛色の穂が出てくる晩秋、水辺に近い土手の斜面に紫色したより花を見つけた。

花びらがユニークで唇のような形。雄しべと雌しべが野鳥の冠羽のように飛び出している。マガンの首のように見える。

マガンは戦前までは町内でも見られた。晩秋の日没前に落穂などを採餌してねぐらに帰る。このときの飛行編隊を見て「カギになれ、サオになれ」と楽しんだものである。今は国内でも数少なく、宮城県伊豆沼周辺に1万羽以上が越冬すると霞ヶ浦西部の湿地帯に同科のヒシクイと混じって飛来がある。

町内で観察されるガンカモ科のほとんどが東シベリアで繁殖後、北海道を経由して太平洋沿岸ルートを下する途中で群れの一部が翼を休める。ほんの2~3日間の滞在なので暖かく見守ってあげたい。

■編集 芳賀町広報広聴委員会
☎028(677)6032 ✉kouhou@town.haga.tochigi.jp
■発行 芳賀町企画課
栃木県芳賀郡芳賀町大字祖母井1020番地
■芳賀町ホームページアドレス <http://www.town.haga.tochigi.jp>
■苦情専用フリーダイヤル ☎0120(753)898

